

2019～2020 年度 目録委員会報告

2026 年 9 月 1 日

日本図書館協会目録委員会

『日本目録規則 2018 年版』(NCR2018 年版)の策定作業が大詰めを迎えたことから、目録委員会では 2015 年度以降、委員の異同を最小限に抑えてきた。そのぶん、NCR2018 年版の刊行を終えた今期は、大幅な交替となった。すなわち、木下直(東京大学)、河野江津子(慶應義塾大学)、田代篤史(NDL)、野美山千絵子(トーハン)、平田義郎(JUSTICE)の各委員が 2018 年度をもって退任し、安食優子(東京大学)、石澤文(NDL)、木村麻衣子(慶應義塾大学)、谷口祥一(慶應義塾大学)、鵜田拓哉(共立女子大学)、藤井眞樹(NII)の各委員が 2019 年度に新たに就任した。これまでと比べると、研究者が多い陣容となった。また、NII からの委員は 2013 年以来となった。委員長は、渡邊隆弘(帝塚山学院大学)が引き続き務めることとなった。

策定作業を終え、委員会の業務内容をゼロから見直す必要があった。NCR2018 年版の維持活動・普及活動を中心に今後考えられる業務内容を洗い出し、優先順位や実現可能性の見通しを検討するところから、新体制の委員会活動をスタートした。

2020 年 2 月、新型コロナウイルス感染症の状況を考慮して予定されていた委員会を急遽ウェブ会議での開催に切り替えた。以後結果的に、期末まですべてウェブ会議での委員会開催となった。また主に委員長の本務状況から 2020 年度前半はほとんど委員会を開けず、この年度の委員会開催は 5 回にとどまることとなった。

NCR2018 年版の維持活動としてはまず、判明した誤植の訂正を行った。2018 年 12 月に刊行した冊子体は、前期末の 2019 年 2 月の第 2 刷に続いて、今期に入った 2019 年 7 月に第 3 刷発行の運びとなった。この時点までに新たに発見された誤植(25 件)について PDF 版も含めて修正するとともに、「第 2 刷正誤表」をウェブサイトに掲載した。PDF 版の修正は、索引を含め 9 ファイルであった。

NCR2018 年版に関して寄せられた質問等については、随時検討して回答を行った。刊行翌期ということでやや身構えていたところもあったが、結果的には今期の 2 年間で外部からの質問等は 7 名・機関からの約 20 項目と、それほど多くはなかった。その他、委員会内で出された疑問等についても随時検討を行った。

エレメント等の LOD データ提供について、前期末の 2019 年 3 月、委員会ウェブサイト に設けた「NCR2018 年版エレメント・語彙等データ提供」ページにて XLSX 及び CSV による簡易的なデータ提供を開始していた。今期に入って、谷口委員を中心に RDF 形式等、より本格的な LOD データ整備作業に着手した。まず 2019 年 7 月、簡易データの設計を見直し、不適切と思われる点について提供データ及び凡例を改めた。その後、新たに RDA 語彙へのリンク情報を加えることとし、委員で分担してチェック作業を行った。一方で、RDF 形式データの仕様についての検討を進め、NCR2018 が依拠する概念モデルをそのまま RDF モデルで表したのではなく、エレメントにおける実際の記録方法などを考慮した RDF モ

デルによる(従って XSLX データと異なる部分を含む)とした。構文的には、Turtle と JSON-LD によるシリアライゼーションを適用したファイルを採用した。JLA ドメインによるベース URI を用いた ID を設定するが、個々の語彙単位のデータ作成は行わず、ファイル単位のデータ提供とした。2020 年 5 月に完成した簡易データを元に RDF 化をはかり、チェック作業等を経て 2020 年 12 月 27 日にデータ公開を行った。合わせて簡易データも更新し、XLSX 形式と TSV 形式(それまでは CSV)での提供とした。この時点でのデータは、実体 14 件(「書誌的実体」など、規則には登場しないが処理上必要な若干のものを含む)、エレメント 381 件(アクセス・ポイントを含む)、語彙のリストの用語 416 件、関連指示子 557 件の、計 1,368 件であった。

NCR2018 年版の普及活動にも努めた。2019 年 11 月 22 日、第 105 回全国図書館大会(三重大会)にて分科会「新しい目録規則」を開催した。目録委員会として分科会を実施するのは 2010 年の奈良大会以来であった。渡邊委員長が「NCR2018 の完成」、木村委員が「NCR2018 で描く目録の未来」の報告を行った。続いて、村上一恵委員が NDL の、河野前委員が慶應義塾大学の、横山委員が TRC の、それぞれ NCR2018 年版実装の見通しを報告した。57 名の参加者があった。

2019 年 8 月の『図書館雑誌』113 巻 8 号に特集「NDC90 周年と NCR2018 刊行を記念して」が設けられ、渡邊委員長と木村委員が寄稿した。渡邊委員長は 2019 年 6 月の『カレントアウェアネス』340 号にも寄稿を行った。また、オンライン開催となった 2020 年 11 月の第 106 回全国図書館大会(和歌山大会)で図書館情報学教育部会が分科会「これからの目録教育」を開催し、渡邊委員長が「NCR2018 時代の目録教育」について配信方式の報告を行った。

2019 年秋、JLA 出版委員会からの奨めもあり、『JLA 図書館実践シリーズ』の 1 冊として NCR2018 年版の解説書刊行をめざすこととなった。委員会で検討の結果、木村委員・鵜田委員が執筆を分担し、委員会としても適宜確認を行うこととした。また、本文中に事例を豊富に示す方針をとったが、それは構文的側面を伴わないデータとなるため、NDL の協力を仰ぎ付録として NDL 適用細則にそった MARC データ例も掲載することとした。当初は 2020 年度事業として計画したが、諸事情により作業は次期に持ち越しとなった。

NCR2018 年版の当初の計画ではデータ作成事例を付録に含めることとしていたが、2018 年 3 月の「予備版」刊行時に、規則には含めず別途の参考資料として作成の検討を行うとした。2019 年度に入って対象資料やフォーマットの検討を開始したが、前記の解説書刊行を進めることとなり、これと連動させて作業を進める計画とした。2021 年 2 月までに解説書収録予定のものを中心に第一次対象資料を確定し、分担作成を行うこととした。ある程度の取りまとめまでできたものもあったが、解説書とともに次期に持ち越しとした。

その他の委員会活動としては、目録規則に関わる国内の諸動向について、随時情報共有を行った。また NCR の将来検討に役立てるべく、IFLA LRM や RDA 等の国際動向についても、断続的ではあるが情報共有を行った。

2021 年 3 月 3 日、国立国会図書館の「令和 2 年度書誌調整連絡会議」が「著作の典拠コ

ントロール」をテーマとしてオンライン開催され、谷口委員と石澤委員が報告を行ったほか、複数の委員が出席者ないし聴講者として参加した。

2019～2020 年度目録委員会委員

渡邊 隆弘（委員長）（帝塚山学院大学）
安食 優子（東京大学）
石澤 文（国立国会図書館）
木村 麻衣子（慶應義塾大学→日本女子大学）
谷口 祥一（慶應義塾大学）
鍋田 拓哉（共立女子大学）
藤井 眞樹（国立情報学研究所→東京外国語大学）
村上 一恵（国立国会図書館）
村上 遥（東京外国語大学→国立情報学研究所）
横山 英子（図書館流通センター）